

分散会報告（要旨）

第一分散会

第一分散会は、二十七名が参加し、鈴木貫仁・原顕彰座長のもとで話しあわれた。はじめに、発題者の久住謙是師が、話し合う七つのポイントの背景に、次の三つの問題があると指摘した。

- (一)今は、社会的、世界的危機に直面している。
- (二)宗門は今、困難な状況に直面している。
- (三)宗門教師の使命感の欠如の問題、すなわち宗門人は今、日蓮聖人より、我が一門たりうるか問われている。

先ず、第一の問題として、一例としてあげれば、サイパン等で収集された遺骨が、靖国神社ではなく、千鳥が淵に葬られている事実、これは、政府が心から英霊を供養するという気持が無く、ただ、何かに靖国を利用しようとしている表れである。我々宗門人は、寺や家庭の問

題だけでなく、このような大きな社会問題にも、もつと目を向けるべきである。世にカナリヤ理論（炭鉱で空気を調べる為にカナリヤを犠牲にする）というのがあるが、我々は、宗祖の立正安国の精神からいっても、率先してこのカナリヤの役を果し、一般大衆が犠牲にならないようにすべきである。

第二の問題では、寺院調査によれば、宗門の全寺院の三分の一が、今後、十年から二十年後に、無住や後継者不在等により、廃寺同然になろうとしている。これは宗門の危機である。しかし、宗門がもつと危機的狀態にあるのは、この事実を知りながら、この問題を皆んなで考えようとしないうことである。今の教師は、自分の寺が良ければそれでよしとしている。今の宗門の危機は、こういった教団自らが招いた危機である。これからの宗門は、個々の寺のことだけを考えず、宗門全体のことを僧俗一体で考えなければ、社会の急激な状態変化に対応できなくなるであろう。

第三の問題、そして帰するところは、教師の質の問題、使命感の問題である。宗門教師は宗祖のごとく命がけで

法華經の布教をせねばならない。駒沢大学の水野先生は、

「法華經には、教師が命がけて法を弘めねばならないと、屢々説かれている。今日、法華教団が繁栄しているのは、この法華經の説に依つて死身弘法しているからだ。日蓮宗がうらやましい」といわれている。また、マックス・ウェーバーの工業立地論のごとく、工場が出来るのは、そこに市場があるからだという。我が宗門には、宗祖の五義判があるのだから、布教の基盤をよく調べて、法華經の心、宗祖の心を自分の心として、宗教的使命感に目ざめ、危機意識を自分自身の問題として布教せねばならない。

又、これらを頭に入れ、信行会づくりを一考すれば、

1、動機充足(縁を大切にし、仲間と会えてよかったと思うようにする)

2、思想充足(安心や、抛り所を持たせる、ありがたいと思う心を起さす)

3、役割充足(組織の中で役割を与え、私がないと、という心を持たす)

等の充実した信行会づくりをすれば、必ず成功へ導くは

ずである。

この久住師の発題を受け、以後、必ずしも七つのポイントの個々にこだわらずに発言してもらうことにしたので、話しあわれた項目を掲げ、順を追って内容を記す。

◎拠点確保と宗務当局の姿勢

山梨県に於て、自費で道場を建立していて、資金融資を当局へ申し込んだところ、保証が無いからといわれて断わられた。何も無いところから始めるのだから保証が無いのがあたり前。結社は私有財産だから、将来離れる恐れがあるので融資しないというが、これでは寺が増えない。これに対し、石井助言者より、いろいろ問題がありスムーズに行かないが、一案として、現在、宗門に五六一カ寺の無住の寺があるので、廃寺の寺号をもつて来るといふことも考えたら、と答えがあった。

◎無住寺院増加の問題

この問題では、無住寺院が増えているのは、何も日蓮宗だけではない。他宗の方がより深刻だと指摘がある。

又、例として、時宗では、北陸が過疎化し、対策として教師を東京に集めて布教させているという話が出された。

これに対し、石井助言者より、宗門の後継者は、今は水平でバランスが保たれてるが、今後は確実に減るであろうと指摘されたが、妙案は出なかった。

◎都市と地方との布教意欲の差

山梨県内では、六三カ寺で題目講を持ち、月例会をやったり、信行会で身延の研修道場も活用し効果をあげ、寺院婦人の研修もやり喜ばれている。しかし、地方寺院がこうやって頑張っているのに、東京寺院では、研修道場の参加者も無いし、葬儀代や墓地代で高いことばかりいうので、田舎に墓を建てたりしているという実状が報告された。これに対し、石井助言者より、東京・神奈川方面に宗門の一割以上の八百カ寺がありながらバラバラで団結が無い、宗門も考えるべきとの発言があった。

◎お題目総弘通というスローガンについて

今までいろいろのスローガンがあったが、このお題目総弘通というスローガンこそ、我が日蓮宗の真のスローガンという意見が多く、中には、このスローガンに徹すれば、宗門はもつと伸びるはず、素晴らしいスローガンが出たとの声もあった。

◎信行会活動の実例

三重のある寺では、グループを作り、篤信の所に何人か集め、順番制で法座を持ち、住職の方から出かけ、好評である。

神奈川では、組寺があり、三、四十代の僧侶が檀家総代を呼び、話し合いをしている。この目的は、寺に二、三人の篤信があれば、その寺は発展すると考えるから。

◎布教の遅れているところはどうか

1、各宗務所にマイクロバスでも置き、各村や団地布教をすべきである。

2、無住の寺でも、篤信の尼さんや、教会の担任を住職させれば、立ち直る。要するに、情熱の問題であり、意気込みがあれば、必ず弘まる。

◎宗門と社会との関連について

個人の信仰と社会との関連の面では、我が宗が一番強い。この利点を生かし、地域の人とより密接な関係を持ち、そこに、お題目を唱えさせるよう導入するのが良い。東京のある寺では、十六年間、すいとんの供養を続け、時には町内の月見もやり、百人位参加するようになり、

今では、本堂で手を合わせて拝んでくれるようになったとの事例あり、また、今、都市は精神的に飢えているから、宗派に関係無く寺に飛び込んで来る。ただ「お題目はありがたい」ということでは、最初はいけない。やはり初めは、とにかく生活の触れ合いからであり、宗派に関係なく寺にこさせ、奉仕させ、後に題目に導くとよいとの意見があった。

◎今後の総弘通運動について

1、問題点

身延では実質は旅館業であり、日中ゴルフをする者が多く、総弘通は程遠いとの自己反省あり、また、今の若い僧侶の中には、先輩の話を聞く心が無い、自分だけなければという人が多いが、仏教の原点、全ての物は関係しているのだから、他の問題も自分の問題として考えたり、懺悔や反省の心を持たねば、総弘通はあり得ないという意見。今まで唱題行や信行会をやったが長続きしないし、マンネリ化している。自分自身も一緒に修行するつもりでやってくるが、これが総弘通になるか疑問という反省も出る。このような教師の資質の問題や意欲の問題

の他にも、地域の問題があり、数の少ない檀家では、中央が思っているように簡単に布教出来ないという意見もあった。

2、宗務当局と個々の寺院の意思疎通

プランは立派だが、それが活用されているかどうか疑問がある。あたかも建築設計士と大工の間のようなものである。プランがその度に変る(〇〇運動)ようでは、皆がついてこない。また、お題目は七〇〇年間弘通されて来たものであり、各寺がやっている。大切なものは、それがどう組織化されるかであるとの意見があった。

3、諸問題をどのように打破し弘通するか。

総弘通というからには、唱えていない者にも唱えさせねばならない。その方法は、

- (イ) 坊さんの手足になるリーダーを作る。
- (ロ) リーダーづくりに檀信徒研修道場を活用。
- (ハ) 題目は行であり、僧自らが模範となる。
- (ニ) 各信行会を交流させ、他の寺を見せ、やる気を起こさせる(奈良県で成功)。
- (ホ) 他寺の成功例を模範とする。

(ハ)戦後非常に伸びた寺が幾つかあるが、皆、寺を解放し、檀信徒を手足として、住職一人をやっていない。法座を作り、核分散の方法をとっている。

(ト)教師が常に勉強し、積極的であり、かつ指導力のあ
る寺が伸びている。

(チ)教箋・葉書等の文書伝道をする。これを長く続ける

(途中で止めない)。

(リ)寺院婦人を大いに活用する。

(ヌ)中央・地方教化センターを作り、情報交換、資料配
布等活動を活発化する。

○成功例(愛知県妙恩寺、信者数二千人)

一人の仏を作るより、多くの善人を作るとの任職の
意向により、先達を重視し、この先達に布教方法(埼玉
石川道場で修得)を習わせ、勉強させ、この先達がリー
ダーとなり、子供会・青年会・婦人会を引っ張って行
く。先達が誤れば、それを、住職や弟子が正す。法座
も、家庭問題が起きぬように家族ぐるみで参加させ、
子供達が交互に木杵や声明を担当する。法座では、各々
が徳を積まさせて頂くといい気持を起こさせ、子供達

にも、珠数を持った者に悪人はいないと教え、善人を
増やすよう教える。月経を行うようにし、命日には、
家族だけでなく近所の人も呼ぶよう指導し、ミニ法座
のようにする。全ての寺の行事・事業は、檀信徒がや
るようにしむける。

○教化センター開設例と特徴

北海道南部教化センター

特徴

1、センター所長を護法事務長とした(既存行政組織の
活用と融和の為)。

2、任期を、センター所長は宗務所長と同じにし、そ
の他の所員は二年とする(センターの独自性の維持の
為)。

3、所員は、所長・布教師会・修法師会・青年会より
推選してもらう(活動を幅広く行う為)。

4、年一回、各会長を新年会に招待し、意見を聞く(各
会との意志の疎通の為)。

5、全ての資料、有益本の配布を無料とする(院や所か
らの見返りが無いという批判が多いセンターのイメー

ジアップの爲。

◎我が宗と他宗の題目の違い

我が宗にもご利益信仰が多く、日蓮本仏論の学会を除くと、余り違っているとはいえない。我々でも、風呂に入つてありがたくなつて南無妙法蓮華經という場合もあるし、立正佼成会や妙智会などは、自分の寺詣りをしなさいといい、その恩恵も受けている。要するに、題目の違いだけでは、太刀打ちできない。もつと新宗教のように動かなければいけない。日本山の藤井日達師は、題目と仏舍利だけで信者を集めているし、しかも、ちゃんとその上、学会や佼成会批判を徹底してやつている。宗門も、もつと活動し、他宗教をもつと批判する位でなければいけない。本当に人にわからせる為には、講義式ではダメだという指摘があつた。

◎国家権力の介入

宗教不活動寺院が多くなり、教団に自浄能力が無くなれば、国家権力が介入する恐れがある。今でさえ、税務調査の名目で寺に介入している。住職は代表役員として宗教法人の尊厳を守るべきである。唱題は菩薩行、故に、

住職は、国や仏様から与えられた人々の権利を守る仕事をしなければならぬという意見もあつた。

(原 顕彰)

第二分散会

第二分散会は、座長小川順道・渡辺義伸両師のもと、二十五名の参加者が熱心に話し合いを重ねた。

まず、発題者の鈴木国守師が題目七つのポイントにそつて問題を整理し、話し合いの糸口を作つた。話し合いの中で、助言者の近江幸正・鎌田行学・植坂行雄各師の適切な助言があり、参加者の真剣な話し合いがなされた。その要旨は、次のとおりである。

①お題目総弘通運動の趣旨徹底について、どのようなか、どんな取り組みをしているかに考へているか、どんな取り組みをしているか

○現場での趣旨徹底は、まだ不十分である。

○宗務所としてまだあまり取り組んでいないし、総弘通運動についてあまり話題となっていない。

○宗務院からのプランが伝わってこないし、宗務所で

も具体的に取組んでいない。

○遠慮づかれて、まだ一息ついている感じであるが、九月十月頃より取組む計画は各地で進められている。

○これから何をやるべきかが問題になっているが、動ける人があまりいない。やっている人、やらない人などバラバラである。

○毎月の行事の中で総弘通の話しをしている。

○自坊多忙だし、教師個人では限界がある。檀信徒の中に指導者を育成してゆく方法を考えるべきである。

その方法として、①管区研修道場で指導者を育成してゆく。②各寺の信行会・法座などの行事の運営を、教師、檀信徒それぞれ役割りを分担しながら指導者を育成してゆく。③護持会の役員や檀信徒の指導者には、宗門として何らかの形——委任状・バッチなど授与すると良い。

○個人でそれぞれやっている事を、宗門で一括して行い、個人の力不足に対し、宗門として力を貸していく必要がある。

○一般に対して教化活動の方策が出ていない。

②運動を推進するために、寺院・管区・教区・宗門全体では何をすべきだと思うか、また、どんなプラン化や取組みがなされているか

○毎月十三日に大鼓を打ち行脚をし、チラシを配り、その浄財をためている。これを全国で行い、十七年で各管区に布教の拠点として日蓮宗会館を建てるとよい。

○きちんとした具体的な、例えば宗徒会館を建てるなど、目標のあるお題目総弘通運動を進めるべきである。

○京都の石田師は、毎月六日九日に太鼓を打ち歩いている。浄財は被爆者に送っている。この様な姿を宗門のものにするとうい。

○各教師の得意の分野を生かして、信徒の教化を進めていくために、地域の教化センターを作る計画を推進しよう。

○管長教旨が檀信徒まで伝わっていない。これは教師も檀信徒も宗門組織の一員であるという自覚がない

から。この様な状況では、総弘通はむづかしいと思
う。

③各寺の信行会を活発にしてゆくために、どのよう
な活動を行っているか

○先代から続いている普通のお題目講がマンネリ化し
ている。今後は、参加者に役割りを分担するなど工
夫を考えてみたい。

○管内寺院のほとんどが信行会を行っている。いろい
ろ工夫してみるが、参加者はあまり変らない。要は、
教師の人格に引かれて参加し、唱えてゆくものだと
思う。

○管内寺院二、三カ寺ぐらしか信行会を行っていない。
形式に流れる信行会を、管区主催や組寺中心で
行うよう動きだした。

○参加者がだんだん少なくなり、寒くなってやめてし
まった。永く続く方法を学びたい。信行会がないと、
やはりさみしい。

○信行会が飲み食いの会になり、中止。今、十万遍唱
えるという形から始めた。今後、それに魂を入れて

ゆきたい。

○団結も信行会の一つであり、信徒と信徒の心を結び
つける大切なものである。

○すべての行事が信行会であり総弘通である。信行会
の形にこだわらず、いま行っている行事を活発にし
てゆく事である。その時、信行に関する根本を忘れ
てはならない。

○宗門において、信行会という組織はまだ十分に定義
されていないと思う。

④「なんのためにお題目を唱えるのか」「今なぜお題
目なのか」「本宗と新興宗教のお題目のちがいはど
こにあるのか」など、お題目の意義と功德につい
て、どう考えどのように説いているか

○お題目とは何であるか。なぜ今必要なのか、はつき
り答えてくれる教師が少ない。

○教師・寺庭婦人・総代も、この問題に答える力を身
につけねばならない。その為に、宗務院は資料を出
さねばならない。

○要は、自分が仏を信じ、仏に見られていると自覚さ

せる。むずかしい説明は不要である。ご利益を頂けるのはお題目であることを、情熱をこめて語るものである。

○まず、お題目を唱えさせるという事を目的に運営している。お題目による個の救いと、世界平和という全体の救いとの両面を、十分にアピールしてゆかねばならない。

○欲望充足のお題目から、どうぬけださせてゆくかが問題である。その為に唱題行で導き、真のご利益と法悦を受けさせてゆく。

○一般は、教学に裏打ちされたお題目ではなく、ご利益に裏打ちされている。だから、まずお題目、そして真のお題目へと進んでゆく。

○入信はほとんどご利益中心である。教化は底から高への繰り返しであるが、教師は一貫したものを持つていなければならない。

○自分の為のお題目で始まるが、人の為のお題目になるよう指導してゆかねばならない。

○過疎地域の寺院は、これらの問題どころではないと

いう状況にある。

○新興宗教とのちがいがいたが、我々の内部の問題としては大切だが、現実の実践の上では、意味があまりないと思う。

⑤檀信徒の家庭に運動を徹底するために、何をすべきだと思ふか

○棚経や月経を活性化してゆく。例として、その家庭で「ミニ講」を開催する。

○募参りなど来寺の折には、寺に上げて話をする。

○行事案内の時は、必ず文書を同封する。

○月に何度も寺に集る機会があるので、その時、信行・相談・法話・反省などをする。

○講の開催は信徒の家で行い、なるべく近所の未信の人を参加させるようにする。

○若い人のために夜行う。集りは少ないが、もつと注目すべきだ。親から子へ伝えるより、子から親へ伝える方がよく伝わる。

○法事の後に法話をする。大聖人のお言葉・日蓮宗新聞・ご法難の話などをする。

⑥ 未信の人々や広く社会に運動を普及するために、

どんな取り組みをすべきか、(お題目の心)を伝え、大衆の苦しみを解決してゆく信行活動のあり方はどうあるべきか、考えていきませんか

○一般の人は通仏教を求めている。遠慮してはだめだ。むしろ法華経でなければだめだと言った方がよい。

○自分は日蓮宗の僧侶だから、仏教界の講演でも唱題から始める。

○旗印をはっきりさせて活動すれば、かえって人に信用される。

○自分のものを十分に出す事が大切である。あそこに行くと、法華経の信者にされると思わせれば、選ばれた人が集まってくる。

○お題目はこういうものであると、宗派を越えて根本を正しく伝えるべきである。

○若い人は宗派への抵抗が少ない。このような若者に興味をもたせる事が大切である。

○本宗は寺の付き合いが活発であり、寺は庶民的であ

る。この伝統は大切にしたい。

○寺院の地域での役割りは、口で唱えるより身で行う事が大切である。

○地域社会では、あまり本宗の特色を出さなくて、一所懸命やっている信仰のある僧侶の姿を見せよう。
○地域社会での役割りをあまり考えると、弘通という事がなくなる。私達は世俗的な役割りだけではならない。

⑦ 教師間の教化についての協同化と信行の組織化をはかり、お題目総弘通運動を推進する中央・地域教化センターづくりの方策について、特にどんな点について取り組むべきかを考えていきたいと思います。
○必要だから作ろうという話だけで終わってしまわず、必要と思っている人々のグループ作りから始めると良い。

○上から作ってくれではまずい。出来ても、現存する組織の名前が変わっただけになる。

○自坊だけで手一杯であり、時間がない。

○お互いが遠いので集まるのがむずかしい。

○寺には危機感がなく、宗門の為に動こうとは思はない状況がある。

○話しは進んでいたが、管内の布教師会との関係でうまくいかなかった。

○誰もがセンターが必要という認識はある。だが、他の組織との関係がむずかしい。

○センターは、建物が必要というわけではない。今日参加している運営委員三名の方の動きがセンターであると思ってもよい。人の集まりがセンターである。

○宗務所と対立するものではなく、宗務所を中心に進め、布教師会がセンターの役割りを果たせれば、それをセンター化する。

○資料を集めたり、状況に応じすみやかに動くのがセンターである。

○社会も信徒も常に変化している。どうしても情報や資料が必要である。各寺にもセンターが必要である。

○教化センターごと、寺ごとの情報交換をし、協力が必要である。今後、ファクシミリを取り入れ情報交換を盛んにしていきたい。

(渡辺義伸)

第三分散会

第三分散会は、新井貫厚師の座長にて、二十一名が参加して進められた。

最初に発題者竜沢泰孝師から自坊における布教体験、特に現代のメカニズムを十二分に活用したファクシミリ布教活動の体験を発表し、社会生活の中で心を広め、法華経の題目の広宣流布、現代のスピードに対応した利用方法を行っている事に関心を集めた。又、助言者の中野文海師は、現代社会に適應する手段を考えること、つまり宗教々団の独自性と現代社会に適應性をもつこと、この二つがないと、教団の活性化にならないし、お題目総弘通運動も地につかないのではないか、という意見を戴き、討議に入った。以下、討議の要旨を簡条書きにする。

①お題目総弘通運動の取りくみ方

○今、再びお題目総弘通運動とは？、人の命の大切さ、争いのない世界(世界立正平和運動)の為のお題目が必要、これには、是非教化センター設立への強化を

望む。

○本山の貫主が率先して唱題行脚ぐらいしてほしい。

教師の啓蒙にもなり、運動が盛り上る。

○お題目運動のスローガンが地についていない。せつかく護法運動を継続しているのに、今度内局が変わるとスローガンが変わる。今後は継続してスローガンを統一してほしい。

○自分の特意とする分野を、管内の教師で分業するとよい。

○お題目を唱えなさい、貴方の心は安穩になりますよ、では人は寄らない。実社会において、九識靈断のように信者を作らなければ、我々の布教は行きづまり、未信徒を信徒にするのでなく、現在の信徒を如何に引きとめておくか苦慮している。

○先祖供養のお題目は唱えるが、私達が運動を展開するに当り、全体的に力不足で、お題目の御利益が目に見えて表れない。なかなか説明に困る。

○教師の自己反省が根本的問題である。深い信仰を持ち、現代社会に対応する教化方法を研究すること

ある。

○布教師がどこ迄信仰と信念をもっているか、檀家数の多い寺院は、布教活動の意識がない。貧困寺院は信者獲得に一所懸命で、全体に組織的認識に欠ける。

②お題目の意義と功德について——寺院での取り

くみ方——

○信心会に来る人達はお題目の功德については判るが、若い世代には浸透しない。ただ一人で行う事は無理であり、教化センターの様な協同的な場所がほしい。又、分業化も望ましい。

○月経で一緒にお参りすることを心がけ、特に子供がいる家では、子供と一緒にお経を読む。

○朝がゆ会二回、妙見講・尊神講で月四回、檀信徒教化を図る。法要後、座談形式で法座をする。妙見講では、お経練習、尊神講では御遺文の学習会を行っている。

○唱題行を通じて、題目三昧の境地を持ってもらい、感謝のお題目、ザンゲのお題目というように指導している。

○組寺単位で当番寺を決め、最底五名の人々を集めて
信行会を行っている。縁のある人の子供達を集めて
尊神様の日にお題目を唱え、幼い頃からの仏縁を作
らせている。

○毎月信行会を行っている。お寺では、十二年前より
夏祭りを信仰ぬきで行っており、他宗でも半分の人
が参りにくるようになった。又、地元の青年会が寺
で青少年の夏期訓育道場を行っている。

○法要の都度、檀信徒と一緒に声明、お経を唱え、僧
俗一体となって法要をし、分家した人は、必ずお
寺参りをさせている。

○信仰とは、仏となることが究極の目的である。御題
目受持でなければいけない。他宗や新興宗教に入っ
てはいけない。純粹に教えの上では、浮気はいけな
い、というようなきびしい接し方、教化方法をとっ
ている。

③ 信行会のマンネリ化をどう防ぐか

○信行会は、十年以上たつとマンネリ化してしまう。
その時に、どのような処置方法をとるか、

○自分の寺に合った、又、地域の実状に合っているか
どうか考えて見る。

○十年間位でマンネリ化する事は事実で、五年位のサ
イクルで信行会々員の新人を作って導入する。

○布教活動の協同化を計ることが望ましい。又、可能
な限り集りやすい方法を考えること。

○寺院の固定化(世襲化)によって教団の力が沈滞しが
ちになる。その為にも、宗祖のお題目を伝える教師
として檀信徒の核を作らなければならない。

④ 教区管区の取りくみ方

○本日の出席者は別であるが、この様な会合に出席し
ない教師は、何をやってもだめ。

○宗門としても大乘的見地に立って、宗務院当局でも
考えてもらいたい。例えば、全教師を、必ず地区の
教研会議に出席することを義務付けるとか。

○この様な所に出席しない教師は、ほとんど自坊護持
の意識が強く、協調性に欠ける。これでは、お題目
総弘通の発展性が望まれない。

⑤ 教化センターについて

○資料だけでなく、もっとファクシミリを利用したらどうか。

○日蓮宗新聞と日蓮宗の教義内容が間違っている。現状では、この様な問題をチェックする場所がない。

教化センターがここまで手を延ばしてもよいのではないか。

○教師・檀信徒の教学、又は人生相談等、総合的指導する相談員を置くことを望む。

○地域教化センターの役割も大切である。特に地域的環境を把握し、調査をきっちりとして中央に直結する様に心掛け、地域に合った布教活動が出来る様考慮してほしい。

以上のような各師の熱心な討議が行われた。そして最後に助言者の中野文海師より、「宗憲にもあるように、地域信仰の為に、本山級の僧侶は先頭になって唱題行脚は是非行つてほしい。又、今日発表された各単位寺院の御題目総弘通運動に対する真剣な取り組み方、又、各師の創意工夫されて取りくんでいる姿、これがお題目総弘通の一番の近道だと、私は感じた」との締めくくりで閉

会した。

(井村大祐)

第四分散会

座長豊田正通、助言者北川即正・都龍張、発題者山口裕光、運営渡部公容・西片元證各師、参加者二十五名

①お題目とは何なのか、どのように考え、どのように説いているか

○本宗では、日蓮聖人を度外視したお題目は考えられないが、現状では、宗門内においても、お題目の觀念がまちまちであるような気がする。

○新興宗教のお題目の修行は、自利的な面が強いように思う。

○入信のきっかけとしては、現証利益が効果的である。それからお題目の素晴らしさを説いていく。

○統一信行会の際にアンケートをとった。その項目の中に、「なぜ、お題目をありがたと思うか」という設問があり、解答の内訳は、一位が先祖供養、二位が現世利益、自己の成仏を願うは四位であった。大

聖人の教えと檀信徒の考え方が逆になっている。

○自分の心を変革しないお題目の唱え方は、本当のものではない。行動と変革のお題目が宗祖のお題目である。平和を念ずる気持ちだが、自分のお題目である。

○もっとも大事なことは、我々の唱えるお題目が久遠の本師釈迦仏から本化上行日蓮聖人に付嘱されたものであることを自覚し、末法においてこれを唱えていけば、救われるということを通じて弘めていくことである。

②お題目を弘めるために何をしているか、今後何をすべきであると思うか

○実際に今やっていることは、月回向。その場に親族が集まり、法座・法話・講話をしている。もう一つは、地域的なものであり、こうした二種類の集会をもっている。

法座においては、個々の体験を話させ、最後に私がかまとめる。老若間の話し合いも活発になり、体験を話すこと自体が、法座を生き生きとしたものにする。家庭で法座をもつ時には、例えば、病人のある

家庭では、病人を中心として家族が反省しあう。こういう場合、最初に教理を言っても、一般の人々はなかなか受け容れない。

この法座は毎日のようにもたれており、多い法座は百人程度にもなるが、二十〜三十人が最も適当と思う。こうした法座は、昭和二十三年頃からやっており、一つの法座を定着させるのに、約十五年間位かかったように思う。

法華経講話・御遺文学習なども行なっている。それによって、寺で行なわれる行事の背景などもわかり、法要などは活発になる。

○檀信徒の教化にとどまらず、広く社会に教えをもたらしすべきだと考えているので、例えば、看護婦さんの宗教教育の講師として、生死の問題、安心の問題、ガン告知の問題などに関わっている。

○教化の第一線では、御利益は非常に大切なことである。しかし、御利益主導の教化とは別に、宗教者の役割りの変化の時期に来ていることも自覚しなければならぬ。すなわち、当病平癒を祈ると同時に、

よい生き方、よい死に方を教えるべきであり、ガン患者の場合には、いかに最後の命を全うさせて死を迎えさせるべきか、といういわゆる、末期治療の問題に対処しなければならなくなってきた。

○いろいろな行事によって、種々の階層に対応した教化を試みているが、社会の変化を実感している。例えば、伝統的家族制度から核家族制に移行していくことによって、一家の仏壇で二家の先祖祭祀供養をしなければならぬなどの問題が生じ、これによって伝統的な従来の仏壇観、ひいては墓相観などは新たな対応を迫られているのではなからうか。

○私の管区では、教化センターを設立した。日青などの仲間で御遺文講読会を作り、それが教化センターとなった。地域における正しい教化の在り方になつていくものになるであろう。

○仏国土顕現のために平和運動に入り、被爆者救援活動をを通じて平和の重要性を知った。政治問題をタブー視して、平和運動の連立協力はできない。運動が宗門内に固まる傾向を打破していくのが、今後の

課題である。

③お題目総弘通運動に対する反省と展望

○なぜ、この時代にお題目を唱えなければならぬのか、という疑問に答えられない自分を不勉強であると感じている。

○創価学会批判をしようにも、相手の学会の方が教学的知識において勝れている。まず、勉強しなければならぬと思った。

○僧侶自身が真剣に日蓮聖人の教学を信解、体得して、布教にたち上るべきである。そうでなければ、本当にお題目を受持することも、成仏することも、また人をその道に入れることも出来ない。

○日蓮宗は、体験を通じて感得したものを人に伝えていく伝道宗門であると思う。そういう意味で、僧侶が社会の中に入りこんで、もつといういろいろなことを体験し学ぶことも必要である。すなわち、単に話をするというだけでなく、個々の人々に介入して共に喜び共に悲しむという布教姿勢が大切である。

○本宗僧侶は、社会のニーズに対応しようとしていな

い。檀信徒にかぎった場合はともかく、一般の人々を相手にした時に対応の仕方が把握できていないのではなからうか。

○先祖供養の信仰から脱脚し、真の意味での信仰心、法華経への帰依を布教しなければならぬ。また、檀信徒の家庭を浄化することが、未信の人々の入信につながると思う。

○布教活動の根本の場は寺であるが、それが布教拠点としての機能を真に発揮するためには、寺族が心を一つにしていくべきであろう。(三原正資)

第五分散会

座長 小倉光雄・神谷行宏

運営 植田観樹・鈴木浄元

発題者 古河良皓

助言者 井本学雄・岩堀豊種・新聞智照・井藤太然・石

田良正

座長小倉師より、統一テーマ「お題目総弘通運動の推

進をめざして」、分散会(話し合い項目七つのポイント)の説明後、発題者古河良皓師より、お題目総弘通運動二年目にあたり、宗門の目指す第一期六カ年の目標の一つとして、

(イ)信行会づくりに、檀信徒の積極的参加をはかるべきである。檀信徒自身に、自分が主役であると自覚させる。(ロ)一般の檀信徒には、給仕(奉仕)修行させるべきである。

(イ)寺報の発行。

(ニ)信行研修会(信行体験)・長時間の唱題行。

(ホ)月例会・年中行事・団体参拝・万灯結社等すべての行事の運営に檀信徒が主眼となって「たずさわって」ほしい。

(ハ)法座の導入——今迄の私どもの方法(唱題・読誦・御書の研究)だけでは、信者の実生活との「かかわり」合いが薄く、新興宗教の法座を見学して見ると、信仰を通して人格の変化、悩み事が解決されているかどうか、成仏が出来るかどうか、喜びをもって生活しているかどうか、反省・告白の場所であり、魂が救われなければ

ば、本当に救はれない人助け・人間改造の場でもある。
仏性開顕であり、日常生活の仏教指導でもある。

私達は、この法座の良い点を取り入れて、私達自身の姿勢を正して宗祖の「末法にして法華経を唱うる人は：：：涌出の菩薩にあらずんば唱へ難き題目なり」……を心に誓って精進すべきである、との発題の発表があった。

話合い項目七つのポイント

①お題目総弘通運動の趣旨徹底についてどのように

考えるか、どんな取り組みをしているか

地方に於いては、中央の「呼びかけ」が徹底していない事が多く、教師の研修講座を設け、教師育成にもつと力を入れるべきであり、教師全般が反省すべきである。

又、教師の集合、護持会長の集まり、寺院婦人の集まりを強めて、お題目総弘通運動の趣旨徹底をしなければならぬ。長谷川所長の基調報告は現状をとらえたものであり、我々は、信行会を通して一般の檀信徒に、先ず世界平和・立正平和を祈らしめなければならない。

②運動を推進するために寺院・管区・教区・宗門全

体では何をすべきと思うか

③各寺の信行会を活発にしてゆくためにどのような活動がなされているか

近畿教区に於いて、檀信徒研修道場・僧風林等が開かれている。が、宗門の「十八カ年の展望」を立案しても、原爆が使用されたら、全世界は滅びてしまう。反核運動・世界平和を、先ず祈るべきだ。総弘通運動は、最終的にはとらへにくい。が、教研会議十八年の「あゆみ」全部が総弘通運動であり、平和運動でもある。

信行会のあり方、虫封じ、赤ちゃんのお寺まいり、ベクトル供養、水子供養等、マスコミを利用する。

青少年指導員になり、非行少年・いじめ・進学問題を通じて地域社会に未信徒布教に徹する教師の自覚、教師の中に唱題行の指導が出来ないのであるが、練習、習得すべきである。

信行会の中で地域別に班を作り、電話で動員をかける。お経の読み方、人手の無い家の子供を寺であづかる。日曜学校を設立し、若妻会を作り会の若返りをする。檀信徒青年会を始める。倫理・道徳を加味し人物の養成に尽す。唱題行のみにかたよらず読誦行も成立させたい。

世界平和——僧俗一体となって立正平和・世界平和を
先ず一番に祈ろう。核兵器の「せつめつ」、核戦争反対、
太鼓をたたいて唱題行脚や寒修行、広島・長崎まで唱題
行脚出来る様になりたい。先ず、世界平和、国家の平和
を祈った後、個人の祈願をすべきである。

法座の問題——杉並の立正佼成会本部へ見学、参加者
が話す人も聞く人も皆修行である。人の問題を自分の問
題とし、みんなで護つてあげる、法座の話は他言しない、
親兄弟でもいえない事を相談する、人生相談である。良
い点を我々の布教にとり入れて行きたい。

だが、我々の檀信徒制度では、親類兄弟の集まりが多
く、地域も「せまい」ので、お互の「プライバシー」が
守られず、難点も多いとの意見も多く出た。

新興宗教の問題——近頃、お題目系の新興宗教を始め、
カトリック系のエホバの証人、モノミの塔、トップビジ
ン、倫理の会、早起き会とか、種々の教団があり発展し
ているが、我々は自己に厳しく、宗祖の心によって御題
目の流布に務めなければならず、新興教団の真剣な気持
ちを持ち続けなければならないと自戒しなければならな

い。お寺迄きて「折伏」をやる、青年会員の熱心さをま
ねなければならぬ。

なんのためにお題目を唱えるのか、又、新興宗教のお
題目のちがいはどこにあるのか。

先ず我々は、日蓮教徒として宗祖の心に従った心口意
三業のお題目でなければならぬ。教師自身が自分に厳
しくし、檀家を信者にかえる行動をおこさなければなら
ない。テレホン相談室説教等、未信の者にも接点をつく
て行かねばならぬ。

④お題目総弘通運動を推進する中央地域教化セ ンターづくりについて

地域教化センターの重要性は解るけれども、現実には、
教師の関心度が薄い。各センターに専従者がいれば活動
しやすい。各寺院がセンターであると自覚しなければな
らない。又、中央教化センター設立を強く要望するもの
である。世界平和を前提とした総弘通運動をしなければ
ならない、と結論した。

(神谷行宏)

第十九回中央教化研究会議誓願文

私達第十九回中央教化研究会議参加者百四十二名は、宗祖御入滅の地、池上本門寺に会し、統一テーマ「お題目総弘通運動の推進をめざして」のもと、今、我々本化の教師は、何を反省し、何をなすべきかを熱心に討議しました。爛熟せる物質文明は、人心の荒廃と相互不信の社会を生み、緊迫せる世界情勢は、人類絶滅の危機を招いています。この末法濁世を救い、輝ける二十一世紀を開くためには、上行所伝のお題目を唱え弘め、立正安国、世界平和の寂光浄土を顕現することです。

私達参加者一同は、この会議の成果を踏まえ、立教開宗七百五十年の聖年をめざし、異体同心、お題目総弘通運動に邁進することをお誓い致します。

昭和六十一年九月四日

第十九回中央教化研究会議参加者一同

第十九回中央教化研究会議要望事項

- 一、お題目総弘通運動が目指す世界平和の目的達成のため、実践活動を推進されるよう要望します。
- 一、お題目総弘通運動の意識高揚のため、中央教研会議等を通じ、宗門全教師参加の体制実現についての配慮を要望します。

一、お題目総弘通運動について、宗門内局の交代ごとにスローガンの変更なく最終（運動期間中）年まで堅持されま
すよう要望します。

一、お題目総弘通運動のため、檀信徒リーダーの養成に向け、表彰規定・授戒規定等について検討されますよう要望
します。

一、中央教化センターの早期設置を実現し、地方教化センターの設立・運営についての指導教化と、センター相互間
の有機的活動推進への体制作りについての配慮を要望します。

昭和六十一年九月四日

中央教化研究会議参加者一同

日蓮宗宗務総長

長瀬貫公殿